HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	ふれあいサロンの継続的な運営を可能にする要因
著者	菅原，浩信; SUGAWARA，Hironobu
引用	開発論集(100)：9-21
発行日	2017-09-29

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

開発論集　第100号　9-21(2017年9月)

ふれあいサロンの継続的な運営を可能にする要因

菅　原　浩　信*

1．問題意識

近年，独居高齢者や高齢者夫婦のみの世帯が急増していることに伴い，孤立化や引きこもり等の諸問題が顕在化してきている。これに対し，町内会・自治会の役員や民生委員による戸別訪問をはじめ，安否確認や見守りの取り組みがなされている。しかし，個人情報保護との兼ね合い，町内会・自治会の役員の高齢化や後継者不足等により，必ずしも十分な成果があげられているとはいえない。

そこで，最近注目されてきているのが，ふれあいサロンである。ふれあいサロンとは，「身近な地域の町内会館などを拠点として，高齢者の生きがいや社会参加，健康づくり，閉じこもり防止を目的に高齢者と町内会の福祉部員などが一緒に企画・運営しながら，茶話会やレクリエーションなどの活動を定期的に開催し，楽しく，気軽に仲間づくりを行う活動」[1] である。

(一社) 北海道町内会連合会では，町内会・自治会が実施する6つの実践活動 (①交流活動 (ふれあいサロンはここに含まれる)，②在宅福祉サービス活動，③啓発活動，④調査活動，⑤ネットワークづくり，⑥マンパワー養成) に対し，年間3万円（単年指定の場合）の助成を行っている。2015～2016年度の2ヶ年度にわたり，最も多く助成対象となったのが，ふれあいサロンである (2015年度は84事業中19事業，2016年度は111事業中27事業)[2]。このように，新たにふれあいサロンに取り組む町内会・自治会が近年急増している。

ふれあいサロンは，安否確認や見守りはもちろん，外出機会，健康づくり・介護予防，仲間づくり，社会参加・生きがい創出，高齢者と地域住民の間の出会い・集いや交流・ふれあい等，様々な機能を有している。そのため，高齢者をはじめとする多くの地域住民から，ふれあいサロンの継続的な運営が求められている。

しかし，多くのふれあいサロンでは，様々な問題点・課題（例えば，(1)活動プログラムの作成，運営スタッフの確保，参加者の確保や拡充 (森 (2008)，p.69)，(2)スタッフへの負担，世代間交流ができていない，利用客の固定化，運営側に住民の意見が反映されにくい（三宅・井関 (2014)，p.108)，(3)参加者の固定，スタッフの高齢化，新規スタッフが入って来ない，来てほ

*（すがわら　ひろのぶ）北海学園大学開発研究所研究員，北海学園大学経営学部教授

[1] (一社)北海道町内会連合会パンフレット『あなたのまちにもふれあいサロン』(2014年) を参照。
[2] (一社)北海道町内会連合会 (2017)，p.5。

しい参加者が来ない（松井（2014），p.90））を抱えており，中にはその継続的な運営が危ぶまれるものもみられている。

2．先行研究

ふれあいサロンに関する分析はこれまで数多くなされているが，その大半は現状の紹介や，前述のような課題の提示にとどまっている。

その中で，ふれあいサロンにおける課題として，(1)予算が少ない，(2)運営協力者の担い手がいない，(3)運営管理者の担い手がいない，(4)参加者が限定されている，の4点をあげ，ふれあいサロンの持続的な運営が可能な条件として，(1)担い手の発掘，(2)情報の発信，(3)財源の確保，の3つをあげる指摘（松浦・浦山（2010），p.532）がある。

しかし，そこでは，(1)ふれあいサロンの新規参加者をどのように担い手（運営協力者，運営管理者）にしていくのか，(2)どのような収益事業を展開すべきなのか，(3)参加者の足を遠ざけないようにするため，利用料はどのくらいに設定すべきか，(4)自主財源を増やし，どのようなプログラムを提供すべきか，といった点が明らかにされていない。

つまり，ふれあいサロンの継続的な運営を可能とするには何が必要なのか，について具体的には明らかにされていない。

3．研究目的・研究方法

そこで，本稿では，ふれあいサロンの継続的な運営を可能にする要因について，具体的に明らかにすることを目的とする。

そのため，北海道内のふれあいサロンのうち，2年以上継続して運営されている[3]，4ヶ所のふれあいサロンを事例として取り上げ，当該ふれあいサロンを運営する町内会・自治会の役員等（運営責任者等）に対して実施したインタビュー調査等の結果に基づき，分析・考察を行った。

4．事　　例

本稿で分析対象として取り上げる4ヶ所のふれあいサロンは，(1)「とよかわ喫茶和み」，(2)「お休み処『ふなみ』」，(3)「どんぐり・コロコロ」，(4)「いきいきふれあいサロン」・「旬を食べよう食事会」である（表1）。

[3]「一定期間（2年程度）の活動継続が，サロン活動の多様な効果を高める可能性が示唆されている」（高野・坂本・大倉（2007），p.135）という指摘に基づいて設定した。

表１　分析対象事例

サロン名称	市町村	町内会・自治会	開始年	開催回数
とよかわ喫茶和み	小樽市	豊川町会	2010 年	月１回
お休み処「ふなみ」	室蘭市	舟見町中部町会	2011 年	月２回
どんぐり・コロコロ	登別市	柏木町内会	2004 年	週１回
いきいきふれあいサロン 旬を食べよう食事会	稚内市	こまどり町内会	2010 年 1999 年	週１回～月１回 年２回

これら４ヶ所のふれあいサロンの概要（①設立までの経緯，②果たしている役割，③運営方針・運営内容，④運営に影響を及ぼす個人・団体（運営を支えている人や組織，サロンを訪れる人たち，似たような内容の活動），⑤運営体制，⑥成果，⑦継続できた理由として考えられること，⑧問題点・課題，⑨今後の方向性）については，表 2-1～4 の通りである。

５．分　　析

これら４ヶ所のふれあいサロンでは，以下のような取り組みを行うことにより，前述のようなふれあいサロンにおける課題の多く（活動プログラムの作成，運営スタッフの確保（運営協力者の担い手がいない），参加者の確保，スタッフへの負担，新規スタッフが入って来ない，予算が少ない等）[4] について解決が図られ，その結果として，継続的な運営が可能になっている（すなわち，この８点の取り組みが，ふれあいサロンの継続的な運営を可能にする要因である）ことが明らかとなった。

5.1. 持ち寄り・差し入れ等によるコストダウン

⑴食器やコーヒーメーカーはみんなで持ち寄る，お茶菓子や景品はスタッフの自腹，出演者にはあくまでボランティアでお願いしている（以上，「とよかわ喫茶和み」），⑵町会の会長や総務部長が取ってきた山菜が食材になることも，参加者やスタッフが自分の家で作った野菜を持ってくる，その他あちこちから差し入れがあるので食材には困らない（以上，「お休み処『ふなみ』」），⑶おもちゃはもらいもの，いろいろな人たちからの支援（プレゼント）があるからできている（以上，「どんぐり・コロコロ」），⑷食材はスタッフ持ち寄りやスタッフの知り合いから調達することが多い（以上，「旬を食べよう食事会」）のように，いずれのふれあいサロンでも，参加者やスタッフの持ち寄り・差し入れ等によって，その運営コストのダウンを図っている。その結果，予算が少ない中でも，ふれあいサロンの運営の継続が可能となっている。

[4] なお，「世代間交流ができていない」という課題については，「どんぐり・コロコロ」で継続的に行われており，また，かつては「お休み処『ふなみ』」でも行われていたことから，本稿では取り上げないものとする。

表 2-1　分析対象事例の概要(1)：とよかわ喫茶和み

設立までの経緯		・2010 年の町会総会（５月）において，豊川会館を一般に開放してほしいという声があがる⇨役員の間で「何かできないか」という議論になる⇨やるのは土曜日，窓口は女性部ということを決める ・６月最終土曜日に，お試しということで無料でサロンをはじめる ・女性部の目玉（となるイベント）をつくりたい
果たしている役割		・独居老人が１人でも来れるようにしたい，来てお茶でも飲んでいってほしいという思い ・独居老人の安否確認，見守り ・高齢者の動向（入院，退院など）を知る場になっている（参加者が話してくれるので）
運営方針 活動内容		・スタッフは名札をつけている⇨参加者も名札をつけている人が多い（名札は次回まで預かる） ・プログラムはイベントプランナーの須貝氏が決めている（知り合いの伝や，新聞に掲載されるボランティア情報（ボランティアやります）に直接連絡して，アプローチ） ・なるべくお金はかけないようにしている⇨自前（スタッフ）でこなすこともある，出来が悪くて不評だったケースも ・須貝氏，長井氏はいずれも元小学校の先生⇨それまでの経験や人脈を活かす，ゲームは自分で考案 ・カラオケだけでもつまらない（歌える人数が限られている，好きでない人には退屈）⇨参加者全員がそれぞれ何か好きなものにあたるように，いろいろと考えている ・前年のプログラムは参考にしない，既存のプログラムをそのままやるのではなく，アレンジしながら新しいものにするようにしている ・みんなで楽しめるもの（「純娯楽」）に，教養的なものはやらない ・毎回やっているのは，和洋舞踊，カラオケ，最初と最後の歌（主題歌，長生き音頭（＝参加者の要望），おひらきの歌） ・体を動かすものを必ず取り入れている ・口を使うゲームは取り入れたい（早口遊び，リズム遊びなど） ・ゲームは足が悪い人が多いので座ってできるものに限定⇨出来ない人がいるゲームだと「のけもの」感をもたれてしまうので最初から企画しない ・みんなで歌うことも必要 ・しり込みする人でも，マイクを回していけば歌うもの⇨「みんなで歌おう」という仕掛け ・途中休憩時間（お話タイム，この日は 13：50 から 15 分）を設けて，席を自由に移動してもらい，いろんな人とおしゃべりをしてもらうようにしている ・当日は待ちきれなくて 11 時くらいから参加者がある⇨どんな早く来ても 12 時になるまでは飲み物を出さない ・クチコミや声かけを重視（参加者の誘引にあたって） ・大皿で漬物を出したことがある⇨人より多くとったと思われるのが嫌で，来なくなる参加者が出た⇨小皿に取り分けて出す，他のテーブルに誘導する等 ・提供する食事は食中毒にならないようなメニューにしている ・食中毒等のリスク⇨持って帰るのではなく，その場で食べてもらうように気をつけている
運営に影響を及ぼす個人・団体	運営を支えている人や組織	・オープンまで残された時間がないこともあって，食器やコーヒーメーカーはみんなで持ち寄る⇨当初は人数ぎりぎり（30 セットくらい）しか食器がなかったが，その後寄付してもらったりして，現在は 50 セットくらい ・300 円とったらどうかとの声もあったが，100 円の入店料でやることにした ・参加者が 200 円，500 円と多く出してくれることもあるし，1,000 円寄付してくれることもある ・入店料はお茶菓子に充当，コーヒー代は町内会の予算（４万円）から ・会館使用料は当初２年間無料⇨水道光熱費がかかる（煮炊きは全部会館内）のが気になり，３年目から３万円負担⇨４年目，５年目は助成金（道町連）をもらい充当 ・足りないお茶菓子や景品はスタッフの自腹 ・町会，連町，市連町はいつも気にしてくれている ・出演者はあくまでボランティア（報酬なし）でお願いしているが，車代として 3,000～5,000 円は払っている
	サロンを訪れる人たち	・初回はスタッフとその知人だけ数人くればいいと思っていたが，実際には 30 人くらい参加 ・この日の参加者 42 名（うち男性８名），平均して参加者は 39 名，この日は５周年ということもあり多かったのではないか ・徒歩での参加がメイン，バスやタクシーを利用する人もいる ・参加者の平均年齢は 70 代 ・接骨院やデイサービスで知り合いになり，サロンのことを知り，誘いあわせて相乗りでタクシーでやってくることも ・参加者のだいたい 60％が豊川町会の区域から，40％がそれ以外から ・手宮地区の連合町会は 11 の単位町会から構成⇨どこの町会でも子供が少なくなっていることから，よその町会の子供でも自分の町会の子供と同じ扱いをする⇨そういうことから，他の町会の行事にあまり抵抗なく出席できるのでは ・新聞記事（この日は道新の取材（須貝氏経由）がある）を見て参加するケースもある
	似たような内容の活動	・参加者は近隣町会のカラオケの会にも行ったりしているようだ
運営体制		・スタッフは 12 名（うち男性３名） ・女性部役員４名，町内会（地元住民，女性）２名，その他ボランティア６名（以前町会のエリアに住んでいた等）で構成 ・開催日は朝７時から設営（男性スタッフ），10 時から煮炊きをはじめる ・開催前日にミーティングを実施⇨当日のプログラムの確認，来月のプログラムの紹介（この時点ですでに来月のプログラムを決めている） ・プログラム確定後，よそからサロンで何かやらせてほしいと頼まれたりして，変更になることもある ・終わった後に反省会を行っている ・お礼のはがきが届くと，スタッフのモチベーションがあがる ・参加者が「行って楽しかった」等と家族に話をする⇨それがやがてスタッフの聞くところとなり，モチベーションの向上につながる ・楽しいから疲れを感じない ・参加者が「ありがとう」「こっちに座んな」等と声をかけてくれる⇨モチベーションの向上 ・町で「喫茶の○○さん」と声をかけてくれる⇨モチベーションの向上 ・役割分担（受付，調理等）は暗黙の了解のうちに決まる
成果		・最近，男性の参加者が増加傾向にある（今日は２人都合がつかないとのことで来ていないが），近隣の町会（清水町会など）からも参加者がある ・市社協のイベントでこの取組を発表したところ，市内各町会から問い合わせがある⇨稲穂町会では中央市場の空き店舗でサロンをやるようになる ・親子で参加するケースも（３組ほど），孫が送迎してくれるケースもある ・抹茶をセルフで立てて飲めるようにしている⇨生まれて初めて自分で抹茶を立てたという参加者も ・コーヒーを生まれて初めて飲んだという参加者も ・サロンではじめて会って仲良くなり，一緒に日帰り温泉施設へ行ったりすることも
継続できた理由として考えられること		・参加者もスタッフも楽しく過ごせる ・スタッフは完全ボランティアだから気軽にやれる ・無理なお願いをスタッフにはしない⇨長く続けていくためには必要なこと ・出入り自由（都合の悪いときは休んでも OK）⇨町会の考え方でもある
問題点・課題		・冬場は参加者が少ない ・スタッフの高齢化 ・ときどき当日のスタッフが不足することも⇨参加者に手伝ってもらったり，声をかけてきてもらったり（＝役員の強み） ・いろいろな踊りをプログラムに入れたいが，踊りを覚えている人がいないので，いつも同じような踊りになってしまう
今後の方向性		・参加者にアンケートをとったら，温泉などの声はある ・１年，１年の積み重ねであるが，10 周年は目指したい

出所：インタビュー調査結果等に基づき，筆者作成。

表 2-2　分析対象事例の概要(2)：お休み処「ふなみ」

設立までの経緯		・2009～2010 年，道民生委員・児童委員調査支援事業により，助け合いマップの作成を行うこととなる⇨追直地区の 6 町会中 4 町会の会長が協力 ・その際，指導を受けた木原氏（住民流福祉総合研究所）から，サロンの必要性を言われる ・マップ作成の際に，高齢者宅をまわると，集まれるような場所が欲しいという要望が出た ・それまで年 1 回，70 歳以上の独居高齢者を対象とした「ふれあい会食会」をやっていたが，それではなくサロンがいいという話が出た ・そこで，信田氏（追直地区民生委員・児童委員協議会）が水本会長に相談したところ，やろうと即決⇨水本会長が町内に声を掛けたところ，町会役員，福祉委員，民生委員，女性部などから賛同者が集まる ・2011 年 4 月スタート
果たしている役割		・来ないとなると安否確認（＝月 2 回安否確認をしているようなもの）⇨いざというときに助け合える関係づくり ・地域の人たちの交流の場 ・ひきこもっている高齢者を引っ張り出したい
運営方針 活動内容		・月 2 回（第 2 ・第 4 火曜日，10：00～15：00），第 2 はお茶とお菓子，第 4 は食事 ・何をやるにも人間関係が大事だと思ってきた⇨輪は 1 つあればいい，小さな輪（グループ）はいらない⇨大きな輪が 1 つできれば，できないことは何もない ・人のことをあれこれ言わない，楽しくやろうというのをモットーとした ・どんな人にもいいところはある⇨いいところを見ると悪いところが見えなくなる⇨そう思って声かけをしていると，（その人に）だんだん協力してもらえるようになる ・誰が嫌だとかはないように人間関係を作ることが大事だと思う⇨誰の前でも同じ振る舞いをするように心がけている ・入場料は最初すべて無料でやっていたが，無料だとかえって参加者の負担になる⇨ 2 回目からは食事代のみ徴収することにした（現在はお茶・お菓子 150 円，食事 250 円），その他冬期の暖房代として 50 円だけもらっている ・なるべくお金をかけずにやる ・いつも声かけを欠かさない（「明日サロンだよ」），高齢者は忘れていることがしばしば ・他のサロンに手伝おうと思って行ってみたら，「いらない」と言われ（せっかく行ったのにと）腹が立ったという人も⇨ここでは，入って欲しい，参加して欲しいと思っているので，そんなことはない ・みんなに平等に声をかけることが大事⇨誰に声をかけて，誰にかけないというように，差ができるとまずい ・サロンに行くのは嫌だが，食事は食べたいという人もいる⇨その場合は出前で料理を持っていくこともある ・基本的には食事（喫茶）とおしゃべりだが，大正琴の演奏（4 周年），クリスマス会，お誕生会（毎月，スタッフ手作りのプレゼントをする）なども行う，その他，新年会，開設記念日，そば打ち見学・試食など ・ちょっとした講話（詐欺に気をつけようなど）もするが，あまり堅い話をすると嫌がられる ・イベント（クリスマス会，そば打ち見学）時は子供たちに声をかける，そば打ちは夏休みだったので子供たちが参加
運営に影響を及ぼす 個人・団体	運営を支えている人や組織	・会館使用料は無料（町内の場合），以前は町内でも徴収していたが，どんどん使ってもらった方がいいということで無料化 ・会館は中部町会と西部町会で管理，会館の老朽化（築 50 年以上）が進んだため改修工事を町会で行う（廃材をもらってくる，人手を号令 1 つで集める） ・会館のロケーションがよい（バスに乗るにも，役所や病院に行くにも，必ず会館の前を通る） ・社協から 2 万円の補助金，町会から 1 万円の予算 ・会長や総務部長などが取ってきた山菜が食材になることも ・参加者やスタッフが自分の家でつくった野菜を持ってくる（自分の家だけでは食べきれない） ・その他，あちこちから差し入れ（近海産の魚介など）があるので食材には困らない ・花をテーブルに飾るが，それも自分たちで育てているものを持ってくる
	サロンを訪れる人たち	・会館が狭いので，他の町会から来たいという声もあるが，町内に限定している ・参加者はだいたい 25 人くらい，多いときで 40 人くらいになる（この日は約 30 人） ・参加者は 1 人暮らしの高齢者が大半（町内なら誰でも OK だが） ・毎回の参加者の顔ぶれはだいたい同じ，入れ替わりはないようだ ・参加者のほとんどは女性だが，男性も 4，5 人来るようになる（来て欲しくて会長が誘ってみた，この日は 3 人） ・参加者の最高齢は 97 歳，毎回楽しみに来る ・参加者の滞在時間は短い，オープンしている 10～15 時までずっといるわけではない⇨みんなの顔を見て安心，みんなとしゃべって安心したら帰宅するようだ
	似たような内容の活動	・市内に 11ヶ所のサロン（高齢者向け）がある，サロンの内容はだいたい同じようなもの⇨期間限定であったり，食事が仕出しの弁当だったりするところがある⇨ここは手作りがモットー，おいしいと評判 ・参加者は他のサロンには行っていないようだ
運営体制		・スタッフは 14 人，いずれもスタート時からのスタッフ，かつては 18 人ほどいたが転居等で減少 ・スタッフ自身も楽しくやっている ・「自分のために楽しく」がコンセプト ・スタッフ自身がサロンに来ること，お手伝いが楽しく地域の人に喜んでもらえることがモチベーションにつながっている ・スタッフ間でのもめごとはこれまで 1 回もない，あったとしても会長がまとめ役を担ってくれるので安心 ・スタッフは 4 人ずつ 3 つの班に分かれ，毎回の当番が食材の買出しをしている ・前日から食材の買出し，当日は全員で料理をつくる⇨当番制だがほぼ全員が集まる ・当番の班はメニューの他にもう 1，2 品作ってくる，何を作るかは当番の班で考える ・1 人暮らしあるいは夫婦だけの人がほとんどなので，大きな鍋でたくさん調理するのが楽しいようだ ・用事があるときは出れないのも可 ・突出したリーダーはいない⇨自然の流れでやっている，みんなで何でも話し合って決めていく，目上の人の意見は尊重するが ・参加者の意見をふまえ，年度初めに 1 年間のメニューをスタッフで決める⇨全員で細部まで話し合って決めているので周知徹底できている ・年 2 回スタッフの反省会をやっている⇨いろんな意見を出してもらい，それをふまえ，やり方を変えるようにしている ・会計担当者を 1 人おいている（2 年交替） ・特別な知識やスキルはサロンには不要，人を思いやる心とあたたかい声かけが大事
成果		・参加しているうちに参加者の顔つきがだんだんなごやかになってくる ・参加者の話などから，参加者それぞれの横顔がわかってくる（今日は病院に行っているとか）⇨民生委員が町内には 2 人いるが，楽をさせてもらっているのではないか ・スタッフは高齢者の顔がわかるようになり，サロン以外でも声をかけて安否確認をしている ・高齢者から悩み事の相談をされることも⇨信頼を得ている ・来る人もニコニコ，スタッフもニコニコ ・西部町会がサロンをうらやましがる⇨民生委員に立ち上げたらと言っているが ・スタッフの生きがいになっている（1 人暮らしの高齢者の人など） ・サロンをはじめたことで町会のこと（町内の人たち）がわかってきた（顔が見えるようになった） ・サロンをはじめてから，例えば草刈をやるという回覧をまわすと，当日朝早くから大勢の人が集まるようになった ・3 周年のときに近隣の保育所の子供が参加⇨ひょっとこ踊りを見せたら喜んでくれた ・地域の子供や保育所の子供との交流⇨高齢者自身も生き生き ・同じ町内でも顔を知らない人，名前が出てこない人がいるもの⇨サロンをきっかけに仲良くなるケースもある ・もともと（サロンを始める前は）それほど町内の雰囲気がいいわけではなかった⇨会長が代わって声かけをやることにより，雰囲気も変化⇨号令をかけると人が集まるようになる ・スタッフの気持ちが 1 つになる
継続できた理由として考えられること		・人のことは言わない ・スタッフ間でのもめごとがない ・何かあれば会長に相談すればよいという安心感（⇨会長もふだんから何でも言ってと話している） ・スタッフ自身が楽しんで関わっている ・自然に目上の人の意見を聞き，みんなで話し合って決めている ・「みんな仲良く，楽しんで，人のことは言わない」というモットー ・町会役員，スタッフの団結力 ・人のために何かをする喜び，それがひいては自分のためという奉仕の精神
問題点・課題		・ひきこもっている高齢者を引っ張り出したい⇨声かけをしているがなかなか来てくれない，それを見て近所の人も声をかけてくれているようだが ・町内の高齢化率はおそらく 50%超，子育て世代はほとんどいない，以前は赤ちゃんを連れてサロンに来た人もいたが転居してしまった ・子供たちとの交流をしたいが，平日昼間では難しいことに加え，町内から小学校がなくなった（統合）⇨バス通学となり，子供の遊ぶ姿が見えなくなった ・スタッフの高齢化（60 代中心だが）⇨継続するには若い人を入れなければならない⇨それには人材（スタッフ）の発掘が重要
今後の方向性		・基本的に今のまま現状維持でやっていきたい ・他地区でもサロン開催を呼びかけている⇨見学の場を広げていきたい

出所：インタビュー調査結果等に基づき，筆者作成。

表 2-3　分析対象事例の概要(3)：どんぐり・コロコロ

設立までの経緯		・母子孤立⇨集まる場を作ってあげたいという主任児童委員の呼びかけに，民生委員，児童委員などが賛同し，2004 年スタート ・高齢者にも顔を出してもらいたい⇨世代間交流もねらった
果たしている役割		・お母さんが気軽に集まる場 ・子供が怪我しないで遊んでもらいたい ・子供同士で遊ぶ，母親同士でしゃべる
運営方針 活動内容		・10 時スタート，11 時 15 分くらいまでは自由遊び，その後パネルシアター（パネルを使った動く紙芝居のようなもの）や歌の時間，12 時終了 ・子供が眠くなったり，むずがったりする傾向⇨最近はやや前倒し（時間短縮）に ・この日は 5 月生まれの子供の誕生会，手形をとってラミネート加工にしてプレゼント ・卒会した子供たちも来れるようなイベントを設定⇨ 7 月最終週に「流しソーメン」を設定（OB 会として実施） ・自由遊び終了後，イベントをやる時間になっても母親がしゃべってうるさいことがあった⇨鈴木氏が怒るとしゃべらなくなった⇨自由遊びの時間を長くするようにした ・フリマの宣伝等，営利目的のことはやらせない ・聞かれたら答える，押し付けることはしない ・こちらから情報を出さない，考えを押し付けない，無色の状態で
運営に影響を及ぼす個人・団体	運営を支えている人や組織	・会館使用料を無料に（光熱費含めて）⇨町内会の支援なしには運営できない ・会館の冷蔵庫に入っている飲み物（町内会管理）は自由に飲んでも OK ・大きな行事（クリスマス会，節分など）をやるときは，何が必要か希望を聞いて，プレゼントしてくれる ・会館のストーブに囲いをつけた（子供が来るからということで） ・町内会から社協に子供の集まる場所がほしいと相談がある⇨子育て支援のモデル地区が近くにあると紹介 ・社協から助成金（年 18,000 円）支給 ・市内に他に 4 ヶ所の子育てサロンがある⇨社協で備品を共同で購入し支給している ・社協に寄付があり，その寄付で絵本を買ってもらった（以前は手作りで絵本を作っていた） ・近隣のグループホーム「しずく」の入居者に声かけ，イベント時には参加してもらっている ・「しずく」の避難訓練に手伝いに行くことも ・流しソーメンの道具を「しずく」で借りる ・予算というものがない（助成金のみということ）⇨おもちゃはもらいもの，いろんな人たちからの支援（プレゼント）があるからできている，18,000 円だけではできない
	サロンを訪れる人たち	・この日は親子 7 組，通常はだいたい 10 組くらい⇨幼稚園の早期保育「ワクワク」の影響か ・昔は（2 年保育の時代は）親子が二十数組（60 人くらい）⇨駐車場を近隣で借りるくらい ・3 年保育になって参加者が減少⇨幼稚園の「ワクワク」「キッズ」は 3 年保育に直結（優先して引き受ける）しており，そっちにとられてしまう ・7 ～10 組くらいが適正かもしれない ・よく来る父子が 2 組（この日は 1 組） ・生後 2 ヶ月くらいの子も来る⇨スタッフのそばで寝かせている
	似たような内容の活動	・子供は 1 ～ 2 歳がメイン，3 歳は幼稚園の「ワクワク」「キッズ」とのとりあい⇨幼稚園のほうの曜日をずらして木曜日はどんぐりに来る子供も多い ・近くに他の子育てサロンがあっても，そこには行かないようだ
運営体制		・運営委員（スタッフ）は 11 人（男性 4 人は全員が民生委員経験者），うち 9 人が柏木町内会 ・鈴木代表は元白老幼稚園園長 ・その他，元ピアノの先生など ・男性スタッフは除雪や駐車場管理，障子がしまらない（指をはさまない）ように工夫している⇨子供の安全管理に気をつけている ・当日朝にミーティング（打ち合わせ），当日終わったら反省会，年 2，3 回親睦会 ・子育てがひと段落⇨子供とかかわりたい，子育て経験を伝えたい ・自分のできることをやる，役割分担はおのずと決まってくる ・それぞれの経験・ノウハウを活かすことができたから続けられた（ピアノ，PC，保育など）
成果		・子供のお下がりのやりとりを母親同士でやっている ・1 人で来る母親は友人がたくさんできるようだ⇨どんぐりで仲良くなり交流しているケースも
継続できた理由として考えられること		・「無理しない」こと⇨休むときは休む（用事があるときは無理しないで休む） ・役職は便宜上のものといいつつも，鈴木代表の責任感や経験に基づくアイディア ・来てくれた母親を見守るスタンス ・この年頃の子供は 1 週間でも成長する⇨子供の成長を見るのがうれしい
問題点・課題		・スタッフの高齢化 ・参加者の数を増やすのは難しい⇨どう現状を維持していくか ・高齢者に来てもらえていない⇨来てもらえるための努力が必要 ・「ふれあい会食会」（独居老人対象）で PR するが，なかなか来てくれない ・若い人にスタッフになってもらいたい（後継者確保）⇨かつての参加者（母親）は子育てが一段落したら仕事をするようになる（専業主婦はなかなかいない）ので，来れない
今後の方向性		・老人クラブが 2015 年 3 月でなくなった⇨そこに参加していた高齢者を呼び込めないか⇨個性の強い人に来てもらっても，それはそれで困るが…⇨でもふるいにかけられない ・体の続く限り続けていきたいが… ・細く長く，いつまでやれるか ・リタイアした夫（が家にいるので）の昼食を作らなければならない世代⇨これ以上手を広げられない ・子育てサロンが市内に増えた⇨やめ時を考える ・町内会としてはやめるまで支えていくつもり ・母親が友人をつくる，子供がケガなく遊んでくれる⇨これで十分な気もする

出所：インタビュー調査結果等に基づき，筆者作成。

表 2-4　分析対象事例の概要(4)：いきいきふれあいサロン・旬を食べよう食事会

設立までの経緯		・高齢化（370 世帯ほど，70 歳以上が 175 人（町内全体の 32～３％）），元気な高齢者づくり，福祉部や民生委員の見守り支援⇨地域主体の取り組みに ・2010 年８月，稚内市の高齢者認知症予防支援事業「脳の健康教室」の開催決定⇨市社協から助成（茶菓子代 6,000 円）を得て，同年９月より 2011 年３月まで実施（毎月第３金曜日） ・2011 年４月からは町内会福祉部主催の「いきいきふれあいサロン」として開催（毎月第３金曜日）⇨認知症予防，麻雀，手芸，いきいき健康体操，ゲーム（老人クラブ連合会から借りて）等を実施⇨毎月１回は集う場づくり ・2013 年７月，道町連の地域活動実践報告に応募⇨同年９月に助成金 30,000 円 ・助成金の活用方法を検討するため，町内会各戸にアンケート調査を実施⇨囲碁，将棋，麻雀，カラオケ，健康体操，手芸等の希望が多く出される⇨ 2013 年 11 月より，７つのサークル活動として実施（囲碁，将棋，麻雀，カラオケ，手芸，健康体操，パークゴルフ（冬はカーリング）） ・旬を食べよう食事会（いきいき交流）は今年で 16 年目
果たしている役割		・元気な高齢者づくり（認知症予防），地域の人のつながり，見守り支援と情報の共有 ・引きこもっていると認知症になる⇨出てきてつながりを持ってほしい
運営方針 活動内容		・高齢者が集う場づくり⇨そのためには引き出し（選択肢）を多く作ることが必要 ・いろいろな催し物⇨単調にならないように ・集まって楽しかったとなるように ・サークル活動は合計 80,000 円（町内会），各サークルに 10,000 円（茶菓子代程度でだいたい余る） ・地域づくりが目的⇨参加料は無料 ・麻雀は介護予防の観点がメイン，上級者には物足りないようで来なくなる ・旬を食べよう食事会の当初はおにぎりと豚汁程度⇨好評⇨福祉部メンバーの増員，料理好きな人が集まった⇨最低でも４品つくるように（この日は山菜おこわ，たこの酢の物，稚貝の味噌汁，ますのフライ，すいか） ・旬を食べよう食事会は事前に参加希望をとる⇨希望を出していて当日来ていない人には電話 ・旬を食べよう食事会は年２回（６，10 月）⇨各 30,000 円（福祉部） ・「来てね」と声かけを一生懸命する
運営に影響を及ぼす個人・団体	運営を支えている人や組織	・高齢者クラブ（寿会），町内会婦人部と連携 ・食材はスタッフ持ち寄りやスタッフの知り合いから調達することが多い（この日は，米，すいか，わらび，ます，タケノコを購入⇨それ以外は持ち寄り等で調達） ・町内会館使用料無料（水道光熱費も無料） ・６月は山菜（婦人部），10 月は市の栄養士にメニューを作ってもらい，栄養士の指導の下で婦人部が調理⇨栄養士のメニューは減塩なので，あまり評判がよくない（婦人部（６月）の方が好評）
	サロンを訪れる人たち	・主な参加者は高齢者（70 歳以上） ・持ち家所有者が多い⇨ 60 歳以上は 60～70％，昔から顔見知り ・サークル活動については，麻雀・囲碁は５，６人，手芸 10～15 人（登録は 20 人ほど），カラオケ３～６人，健康体操８～10 人 ・旬を食べる食事会は，この日 48 人の参加，だいたい同じ程度で推移，ほぼ全員がリピーター
	似たような内容の活動	・特になし
運営体制		・福祉部，婦人部だけでなく，民生委員，地域保健推進委員が連携 ・福祉部が日程を決める（保健師との調整など），婦人部はメニューを決める ・スタッフは 15，６人⇨ 50 代から 70 代，中心は 60 代後半 ・メニューは 10 日前（婦人部の会議）に決める⇨準備は丸２日（前日，前々日），毎回だいたい 50 食用意 ・婦人部はみんな楽しんでやっている，喜んでもらってうれしい ・保健師も喜んでくる，行きたいと手を挙げる ・もめたことは一度もない⇨なかよし町内会，他の町内会にうらやましがられる ・料理の得意分野がそれぞれある（山菜おこわなら蒸すのが得意な人とか）⇨それに応じて役割分担が自ずと決まる ・味付け上手な人がいるので，基本的にはその人にお任せ⇨最終的にはみんなでチェックするが ・毎回参加者が歩いて（坂を下って）来るのを見ると，やりがいを感じる ・婦人部から声がかかって役員になり参加するように ・参加することが楽しい，自分にとって勉強になる ・１つのことをやりとげる，やったあとの達成感 ・年２回だからやれるという面も ・スタッフ同士で情報交換，相談ができる⇨高齢者の見守りにつながる（高齢者の情報が出てくる） ・人間関係がよい，一緒にいて楽しい ・引っ張ってくれる人（釜口婦人部長）がいるからついていける ・みんなが声かけしている，転勤族にも声をかけている ・婦人部の役員会は２ヶ月に１度⇨ほどほどだからよい
成果		・元気な高齢者づくり，地域の人との交流の深まり ・福祉部と地域住民による見守り支援活動 ・サークル参加者の仲間意識 ・参加者の情報交換の場となっている ・サークル活動の参加者はほぼ常連化⇨カラオケはサークル活動の参加者だけで運営してもらえている，あとは福祉部がサポート ・サークル活動の参加者間の交流会を年１回開催 ・他の町内会から見学に来るが，実際に同じように行うところまでにはいっていないようだ ・婦人部の役員ではないが，スタッフとして参加したいと申し出て，この日手伝いに来た人がいる ・別の機会に町内で集まったときに声をかけやすい，イベントに参加してもらいやすい，何らかの役割を頼みやすい（断りにくい） ・地域の人の顔が見えて交流できてよかった，地域の人から声をかけられるように⇨今までより交流が深まっているように思う
継続できた理由として考えられること		・町内会活動として財政支援（活動費） ・福祉部（福祉委員）の活動意欲，福祉委員相互に協議して進める ・婦人部，寿会との連携
問題点・課題		・各サークルの自立，リーダーづくり ・旬のものを集めるのが大変 ・若い世代（育成部）との交流は必要だが，平日の昼間は仕事をもっているので難しい
今後の方向性		・町内会会員からの要望が多様化⇨サークルの多様化

出所：インタビュー調査結果等に基づき，筆者作成。

5.2. 拠点の安価な確保

⑴町内会館の使用料は当初2年間無料，しかし，水道光熱費がかかるのが気になり，3年目から3万円負担（ただし，助成金で充当）（「とよかわ喫茶和み」），⑵会館使用料は無料（「お休み処『ふなみ』」），⑶町内会館使用料無料（光熱費含めて），町内会館の冷蔵庫に入っている飲み物（町内会管理）は自由に飲んでもOK（以上，「どんぐり・コロコロ」），⑷町内会館使用料無料（水道光熱費も無料）（「いきいきふれあいサロン」・「旬を食べよう食事会」）のように，いずれのふれあいサロンでも，町内会館という活動拠点を，無料もしくは安価で確保できている。その結果，予算が少ない中でも，ふれあいサロンの運営の継続が可能となっている。

5.3. 多様なプログラムの展開

⑴和・洋舞踊，カラオケ，歌，座ってできるゲーム等をやっている（「とよかわ喫茶和み」），⑵基本的には食事（喫茶）とおしゃべりだが，大正琴の演奏，クリスマス会，お誕生会，新年会，そば打ち見学・体験等も行う（「お休み処『ふなみ』」），⑶自由遊び，パネルシアター，歌の他，誕生会，流しソーメンなど（のイベント）も行う（「どんぐり・コロコロ」），⑷囲碁・将棋・麻雀・カラオケ・健康体操・手芸・パークゴルフという7つのサークル活動を展開，単調にならないようにいろいろな催し物を行う（以上，「いきいきふれあいサロン」・「旬を食べよう食事会」）のように，いずれのふれあいサロンでも，参加者が飽きないように，多様なプログラムを展開している（つまり，活動プログラムの作成がなされている）。その結果，多様なプログラムに魅力を感じる人たちが参加するようになり，ある程度の参加者の確保が可能となっている。

5.4. スタッフに安心感を与えるキーパーソンの存在

⑴イベント・プランナー（元小学校教諭）が経験や人脈を活かしてプログラムを決めており，開催前日のミーティングで（すでに）来月のプログラムの紹介を行っている（「とよかわ喫茶和み」），⑵何かあれば町会会長に相談すればいいという安心感，会長もふだんから何でも言ってと話している（「お休み処『ふなみ』」），⑶代表の責任感や経験（元幼稚園園長）に基づくアイディアで，これまでサロンが継続できた（「どんぐり・コロコロ」），⑷引っ張っていってくれる人（女性部長）がいるからついていける（以上，「旬を食べよう食事会」）のように，いずれのふれあいサロンにも，スタッフに安心感を与えるキーパーソンが存在している。その結果，スタッフの負担（とりわけ，心理的な負担）の軽減が可能となっている。

5.5. スタッフが無理なく関われる体制づくり

⑴無理なお願いをスタッフにはしない，都合の悪いときは休んでもOK（以上，「とよかわ喫茶和み」），⑵4人ずつ3つの班に分かれ，毎回の当番の班が食材の買い出し（食事作りは3ヶ月に1回），用事があるときは出れないのも可（以上，「お休み処『ふなみ』」），⑶用事があると

きは無理しないで休む(「どんぐり・コロコロ」),(4)食事会は年2回だからやれるという面も(「旬を食べよう食事会」)のように，いずれのふれあいサロンでも，スタッフが無理なく関われる体制づくりが図られている。その結果，スタッフの負担が軽減されることに加えて,「これならできそう」ということで，新規スタッフが入って来やすくなっており，運営スタッフ（運営協力者の担い手）の確保が可能となっている。

5.6. スタッフ間のコミュニケーション機会の確保

(1)開催前日にミーティングを実施，当日終わった後に反省会（以上,「とよかわ喫茶和み」),(2)年2回スタッフの反省会をやっており，そこでいろんな意見を出してもらい，それをふまえ，やり方を変えるようにしている（「お休み処『ふなみ』」),(3)当日朝にミーティング，終わったら反省会（以上,「どんぐり・コロコロ」),(4)食事会のメニューは開催10日前の婦人部の集まりで決める，婦人部の役員会は2ヶ月に1度(以上,「いきいきふれあいサロン」・「旬を食べよう食事会」)のように，いずれのふれあいサロンでも，頻度の差はあるが，スタッフ間のコミュニケーション機会が確保されている。その結果，自分の意見や考えを言うことができ，スタッフの負担（とりわけ心理的な負担）の軽減が可能となっている。

5.7. 自然な役割分担の決定

(1)役割分担（受付，調理等）は暗黙の了解のうちに決まる（「とよかわ喫茶和み」),(2)自然の流れでやっている（「お休み処『ふなみ』」),(3)自分のできることをやる，役割分担はおのずと決まってくる（「どんぐり・コロコロ」),(4)料理の得意分野がそれぞれあり，それに応じて役割分担が自ずと決まる(「旬を食べよう食事会」)のように，いずれのふれあいサロンでも，スタッフ間の役割分担が自然に決まっている。その結果，無駄なく効率的に活動することができ，予算が少ない中でも，ふれあいサロンの運営の継続が可能となっている。また，自分の得意分野を活かすことができるため，スタッフの負担の軽減が可能となっている。

5.8. 参加者への直接的なアプローチ

(1)クチコミや声かけを重視（「とよかわ喫茶和み」),(2)いつも声かけ（「明日サロンだよ」）を欠かさない（「お休み処『ふなみ』」),(3)（子供と高齢者の世代間交流をねらっているので）「ふれあい会食会」で独居高齢者にPR（「どんぐり・コロコロ」),(4)みんなが声かけしている,「来てね」と声かけを一生懸命する（以上,「旬を食べよう食事会」）のように，いずれのふれあいサロンでも,参加者はもちろんのこと,参加対象とされている高齢者に対し,直接的なアプローチを行っている。その結果，ふれあいサロンが開催されることを失念していた高齢者に，思い出してもらうことができており，ある程度の参加者の確保につながっている。

6．考　　察

しかし，今後もふれあいサロンの継続的な運営を可能にしていくためには，解決しなければならない課題が残されている（例えば，前述のふれあいサロンにおける課題のうち，参加者の拡充，利用客の固定化(参加者の固定，参加者が限定されている)，運営側に住民の意見が反映されにくい，来てほしい参加者が来ない，スタッフの高齢化，運営管理者の担い手がいない等)。こうした課題を解決するためには，以下のような取り組みを行うことが必要である。

6.1．ふれあいサロンのネットワーク化[5]

近隣の町内会・自治会等で運営されているふれあいサロンとの間で，ネットワーク化を図っていくことが必要である。

分析対象として取り上げた 4 ヶ所のふれあいサロンでは，例えば，よその町会の子供でも自分の町会の子供と同じ扱いをするので，他の町会の行事にあまり抵抗なく出席できるということで，参加者の 40％は他の町会から参加(「とよかわ喫茶和み」)，という一方で，会館が狭いため，他の町会から来たいという声もあるが，町内に限定（「お休み処『ふなみ』」）という状況であり，ふれあいサロン間のネットワーク化が図られるというところまでには至っていない。

まず，ネットワーク化が図られれば，それぞれのふれあいサロンの参加者は，別のふれあいサロンにも参加することが可能となる（参加しやすくするために，開催日時の調整等を行い，重複を回避するはずである)。つまり，いつものふれあいサロンの顔ぶれとは異なる人たちが参加することになり，参加者の拡充や，利用客の固定化（参加者の固定，参加者が限定されている）という課題を解決することが可能である。

また，ネットワーク化が図られれば，スタッフが足りないふれあいサロンに対して，別のふれあいサロンから応援のスタッフを派遣することが可能となる。経験の少ないスタッフにとってみると，スタッフとしての経験を積む機会がそれだけ増加することになり，早く一人前のスタッフとして活動できるというメリットが生まれることになる。一方，ふれあいサロンにとってみると，そうした機会を活用することによって，経験の少ないスタッフを早期に育成することが可能となる。そうしたふれあいサロンには，スタッフの希望者が集まりやすくなる。したがって，参加スタッフの高齢化(に伴う後継者の確保)，運営管理者の担い手がいない，という課題を解決することが可能となる。

さらに，ネットワーク化が図られれば，それぞれのふれあいサロンが展開しているプログラムのノウハウを共有することも可能となる。ただし，ノウハウを共有した新たなプログラムをそのまま展開するのではなく，それぞれのふれあいサロンの状況に適合した内容にした上で展開しなければならない。そのためには，参加者のニーズ等を把握することが必要であり，結果

[5] 本項については，菅原（2017）を参考にした。

として，運営側に住民の意見が反映されない，という課題を解決することが可能となる。

6.2. 外部他組織との積極的な連携

ふれあいサロンの運営主体においては，様々な外部他組織と積極的に連携を図っていくことが必要である。

分析対象として取り上げた 4 ヶ所のふれあいサロンの連携相手は，連合町内会・市連合町内会，社会福祉協議会，福祉施設(グループホーム)，行政，高齢者クラブにとどまっている。この他に，連携が可能と考えられる外部他組織としては，地域包括支援センター，警察署，消防署，NPO 法人・ボランティア団体，介護施設，医療機関，地域企業等があげられる。

まず，こうした外部他組織との連携が図られれば，例えば，講話の内容・種類を充実させることや，体操・ゲームの種類を増やすことが可能となる。その結果，さらなるプログラムの充実が図られ，ふれあいサロンの魅力が増加することにより，これまで参加してこなかった人たちの新たな参加が期待される。したがって，参加者の拡充や，利用客の固定化(参加者の固定，参加者が限定されている)，という課題を解決することが可能である。

また，ふれあいサロンの多くは，前述のように，外出機会として位置づけられていることから，原則として参加者には徒歩で参加してもらっている。しかし，会場までの距離が遠い，足が不自由等の理由で，ふれあいサロンに徒歩で参加することが難しいような高齢者は，どうしても孤立化や引きこもりに陥りやすく，その安否確認・見守りは容易ではない。つまり，ふれあいサロンにとっては，このような高齢者が「来てほしい参加者」ということになる。中には，「ぜひ来てほしい」ということで，スタッフのマイカーにより送迎するふれあいサロンもみられるが，事故等が発生した場合には，スタッフ個人の責任が問われることになり，リスクは大きすぎる。そこで，こうした外部他組織のうち，送迎用のバスを有する介護・福祉施設や，タクシー会社等との連携が図られれば，前述の参加者の送迎の問題がクリアでき，来てほしい参加者が来ない，という課題を解決することが可能となる。

さらに，こうした外部他組織のうち，一定以上の広さの活動スペースを有する介護・福祉施設や地域包括支援センター等との連携が図られれば，そのスペースを活用して，出張ふれあいサロンを開催することが可能となる。こうした出張ふれあいサロンを開催することによって，会場までの距離が遠い，足が不自由等の理由で，通常のふれあいサロンには参加できない人たちの参加が期待できることから，来てほしい参加者が来ない，という課題を解決することが可能となる。

6.3. スタッフによる「楽しさ」「やりがい」のアピール

何らかの機会（例えば，ふれあいサロンの見学会，社会福祉協議会等によるセミナー・講習会など）において，ふれあいサロンのスタッフが，その活動の「楽しさ」「やりがい」をアピールしていくことが必要である。

分析対象として取り上げた4ヶ所のふれあいサロンでは，参加者もスタッフも楽しく過ごせる，楽しいから疲れを感じない(以上，「とよかわ喫茶和み」)，スタッフ自身も楽しくやっている，お手伝いが楽しく地域の人に喜んでもらえるのがモチベーションにつながっている(以上，「お休み処『ふなみ』」)，子供の成長を見るのがうれしい（「どんぐり・コロコロ」)，みんな楽しんでやっている，喜んでもらってうれしい，参加することが楽しい，自分にとって勉強になる（以上，「いきいきふれあいサロン」・「旬を食べよう食事会」）のように，いずれも，そのスタッフが「楽しさ」や「やりがい」を感じている。

しかし，こうした「楽しさ」や「やりがい」が，必ずしも外部の人たち（例えば，ふれあいサロンに限らず，ボランティアをやってみたいと思っている人たちなど）に伝わっているとはいえない。そこで，こうしたスタッフとしての「楽しさ」や「やりがい」をアピールする機会を設け，そうしたアピールがボランティア活動を希望する人たちに伝われば，「ここならやれそうだ，続けられそうだ」ということになり，スタッフの希望者が集まりやすくなる。その結果，スタッフの高齢化（に伴う後継者の確保）や，（将来的には）運営管理者の担い手がいない，という課題を解決することが可能となる。

7．まとめと今後の研究課題

7.1．まとめ

本稿では，ふれあいサロンの継続的な運営を可能にする要因について明らかにすることを目的とし，北海道内のふれあいサロンのうち，2年以上継続して運営されている，4ヶ所のふれあいサロンを事例として取り上げ，その分析・考察を行った。

その結果，これら4ヶ所のふれあいサロンでは，(1)持ち寄り・差し入れ等によるコストダウン，(2)拠点の安価な確保，(3)多様なプログラムの展開，(4)スタッフに安心感を与えるキーパーソンの存在，(5)スタッフが無理なく関われる体制づくり，(6)スタッフ間のコミュニケーション機会の確保，(7)自然な役割分担の決定，(8)参加者への直接的なアプローチ，という8点の取り組みを行うことにより，ふれあいサロンにおける課題の多くについて解決が図られ，その結果として，継続的な運営が可能になっている（すなわち，この8点の取り組みが，ふれあいサロンの継続的な運営を可能にする要因である）ことが明らかとなった。

また，今後もふれあいサロンの継続的な運営を可能にしていくには，残された課題の解決を図っていく必要があり，そのためには，(1)ふれあいサロンのネットワーク化，(2)外部他組織との積極的な連携，(3)スタッフによる「楽しさ」「やりがい」のアピール，という3点の取り組みを行うことが必要であることも明らかとなった。

7.2．今後の研究課題

今後，ふれあいサロンの継続的な運営を可能にする要因についての分析を深めていくために

は，まず，本稿での結論が他の事例においても妥当するか否か検証することが必要である。

また，本稿では，主として，ふれあいサロンを運営する町内会・自治会の役員等（運営責任者等）の視点に基づき分析・考察を行っており，参加者の視点からの分析・考察については十分とはいいがたい。そこで，例えば，ふれあいサロンの参加者に対するアンケート調査等を実施することにより，本稿での結論の検証を行うことも必要である。

謝辞

本稿の作成に際しては，以下の皆様からインタビュー調査および資料提供等のご協力をいただいた。

⑴　小樽市豊川町会　須藤敏子女性部長，同イベント・プランナー　須貝重秋氏（2015 年 5 月 16 日）

⑵　室蘭市舟見町中部町会　水本巖会長，追直地区民生委員・児童委員協議会　信田有子氏（2015 年 5 月 26 日）

⑶　登別市柏木町内会「どんぐり・コロコロ」運営委員　鈴木テツ子代表（2015 年 5 月 21 日）

⑷　稚内市こまどり町内会　岡谷繁勝会長，同釜口敏夫福祉部長，同釜口英子婦人部長（2015 年 6 月 18 日）

また，(一社)北海道町内会連合会の吉村美由紀氏には，インタビュー調査の日程調整や資料提供等のご協力をいただいた。

さらに，本稿の一部は，北海学園学術研究（総合研究『北海道における発展方向の創出に関する基礎的研究』）の成果である。以上の関係各位に深く感謝する次第である。

なお，本稿に事実誤認および解釈の相違があれば，それはすべて筆者の責に帰すべきものである。

参考文献

(一社)北海道町内会連合会(2017)『ひとりの不幸もみのがさない住みよいまちづくり全道運動　平成 28 年度実践地区実施報告書』.

松井順子（2014)「ふれあい・いきいきサロンの有効性と課題に関する考察―宝塚市の実践例から―」,『大阪千代田短期大学紀要』43：82-93.

松浦健治郎・浦山益郎（2010)「地域住民によるシルバーサロンの持続的運営が可能な条件整理」,『日本建築学会東海支部研究報告書』48：529-532.

三宅康成・井関崇博（2014)「農村地域における『ふれあいサロン』の実態と課題―姫路市郊外のサロンを事例として―」,『兵庫県立大学環境人間学部　研究報告』16：99-109.

森常人(2008)「高齢者を対象とした地域社会での人間関係の構築と生きがい形成のための一考察―ふれあい・いきいきサロンと小地域交流サロンによる事例をもとに―」,『政策科学』16(1)：87-101.

菅原浩信（2017)「『ふれあいサロン』のネットワーク化に関する考察」,『開発論集』99：1-14.

高野和良・坂本俊彦・大倉福恵（2007)「高齢者の社会参加と住民組織～ふれあい・いきいきサロン活動に注目して～」,『山口県立大学大学院論集』8：129-137.